



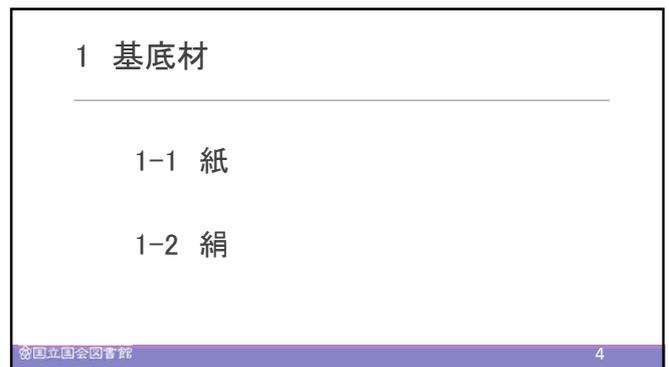
1



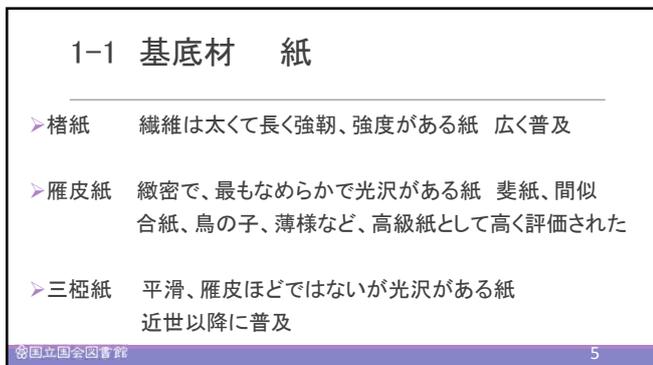
2



3



4



5



6



7

1-1 基底材 紙

- 混合紙 楮に三極・雁皮・藁など2種類以上の材料を混ぜて漉いた紙
- 麻紙 中国から伝えられた最も古い紙 繊維が大変長く、細かく裁断する必要があり生産に手間がかかる
- 舶載紙 中国から輸入された紙 竹紙・宣紙（竹・青檀・藁等）（画仙紙は国産の中国風の紙）

8

1-1 基底材 紙

- 漉き方 溜め漉き
流し漉き 粘剤（ネリ・ノリ）トロロアオイ ノリウツギ
- 填料 米粉・胡粉ー白く平滑にする
泥ー色味つけ、平滑にする
- 滲みどめ加工
打ち紙・瑩紙（えいし）
どうさく（礬水 / 礬砂 / 膠礬）引き 雲母引き

9

紙漉き

流し漉き

トロロアオイ

10

1-2 基底材 絹

絵絹（画絹）

- 平織りの生絹
- 裏彩色 裏箔
- 木枠に張って使用

11

2 色材

- 2-1 墨
- 2-2 絵具（顔料・染料）
- 2-3 箔

12

2-1 色材 墨

煤と膠を練り上げ、香料を加えて成形し乾燥させたもの

- ▶ 油煙墨（茶墨）
 煤：菜種油を燃やして採取
- ▶ 松煙墨（青墨）
 煤：松の木を燃やして採取
- ▶ 唐墨
- ▶ 和墨



画像：株式会社古梅園 採煙風景 / 撮影：株式会社日本製墨書道

国立国会図書館 13

13

2-2 色材 絵具〈顔料〉

- ▶ 鉱物を砕いたもの 天然岩絵具
 青色→群青（藍銅鉱） 緑色→緑青（孔雀石）
- ▶ 土から採取したもの
 黄色→黄土 茶色→岱緒（たいしや）
- ▶ いたば牡蠣の貝殻から製造したもの 白色→胡粉
 鎌倉時代頃までは鉛白のことを指す
- ▶ 合成顔料 ペロ藍（プルシアン / ベルリンブルー）
 江戸後期から大量輸入



国立国会図書館 14

14

2-2 色材 絵具〈染料〉

- ▶ 植物から採取したもの
 黄色（藤黄）→ガンボージ 青色→藍
- ▶ 昆虫から採取したもの
 臙脂色→コチニールカイガラムシ・ラックカイガラムシ
 仏教経典料紙や冊子表紙の丁子引き 黄檗（きはだ）・藍・丁子
- ▶ 合成染料 幕末頃から輸入される
 赤紫色→モーブなど

藤黄：ガンボージの樹液



国立国会図書館 15

15

絵具

〈顔料〉 藍銅鉱と群青

〈染料〉 キハダ 丁子（クローブ）



コチニールカイガラムシ

国立国会図書館 16

16

2-3 色材 箔（はく）

はく

- ▶ 箔 金属の極薄シート 薄さ1/10,000ミリ 金碧障壁画 裏箔

でい

- ▶ 泥 箔を粉末状にしたもの

すなご きりはく

- ▶ 砂子・切箔 箔を細かくしたもの・正方形の小片にしたもの

のげ きりがね

- ▶ 野毛・截金 箔を細く切ったもの・糸状に細長く切ったもの
 膠によって基底材に固定

国立国会図書館 17

17

3 接着剤

3-1 膠

3-2 小麦粉澱粉糊

国立国会図書館 18

18

3-1 接着剤 膠

獸(鹿、牛、兔)、魚などの皮や骨から抽出したゼラチン

- ▶ 顔料どうしをつないだり、
顔料を基底材に固定する接着剤
- ▶ 墨、箔の接着
- ▶ 木工品の接着



19

3-2 接着剤 小麦粉澱粉糊

生(正)麩糊 小麦粉から抽出した澱粉を煮たもの

- ▶ 紙と紙 紙と裂の接着 裏打ち 表装
- ▶ 新糊 作ってすぐ使う生麩糊
- ▶ 古糊 生麩糊を10年程度寝かせて
接着力を弱めた糊
柔らかい仕上がり



20

4 材料の劣化と保存 (経年・保存環境・利用による)

【劣化による変化】

- ▶ 基底材 生物被害 折れ 亀裂 破れ 擦れ 欠失 変色
固着 しみ 腐食 ももけ 蒸け(フケ) 絵具焼け
- ▶ 色材 変色 退色 剥落 不適切な燻蒸薬剤による変色
- ▶ 接着剤 顔料の剥落・剥離・粉状化・亀裂 糊離れ
裏打ち紙の剥がれ 虫害

21

4 材料の劣化と保存

- ▶ 材料の視点から劣化の進行を抑制する
 - ・材料に適した保存環境
 - ・材料に負担がかからない利用方法
- ▶ 手当て 部分 or 全体への処置 専門家に相談
材料の知識が必要
- ▶ 修復の原則
 - ・原資料の尊重
 - ・記録作成
 - ・安全な材料や処置
 - ・可逆性のある処置

22

5 終わりに 材料の持つ情報

- ▶ 製作年代・製作技法・来歴・時代背景などを探る
- ▶ 材料の研究 様々なアプローチ
 - ・目視調査 劣化の状態 使用痕 装丁 改装の痕跡
 - ・科学分析 絵具や紙繊維の同定 年代測定

文化財保存科学

23

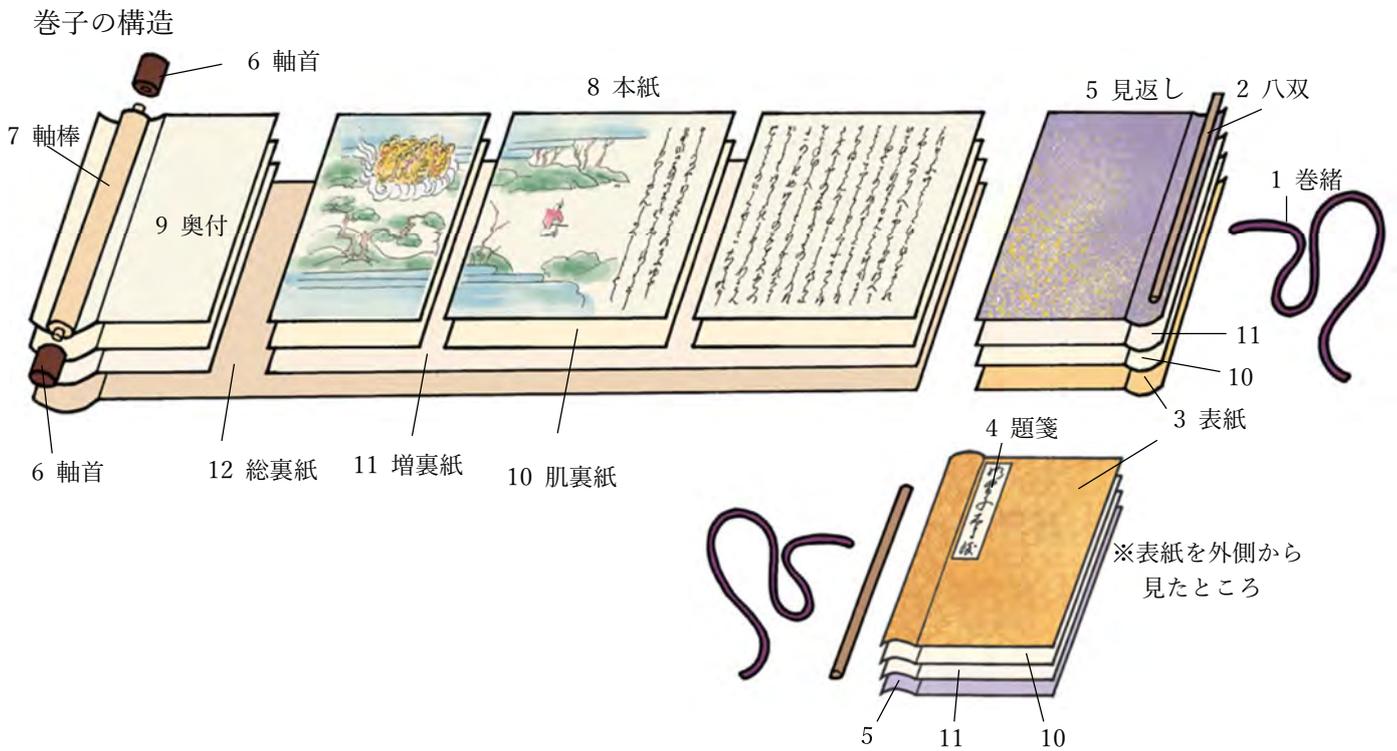
5 終わりに 材料の世界

- ▶ 歴史
 - ▶ 日本画製作・古典技法
 - ▶ 和紙製造
 - ▶ 資料保存
 - ▶ 文化財修復
 - ▶ 文化財保存科学 など
- } 様々な分野につながる

日本古典籍資料の理解を深めるために材料の知識も大切

24

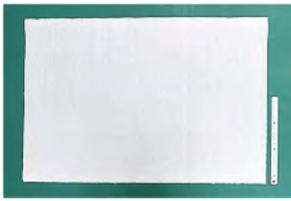
巻子の構造と材料



※裏打ちの回数は、本紙や表紙、見返しの厚さや柔らかさ等によって異なる。経典等は裏打ちが施されていないものが多い。

巻子の材料

	名称	写真・図	解説
1	まきひも まきお 巻紐/巻緒		巻子を巻き止める紐。表紙のめくれや巻子が緩むのを防ぐために、八双に取り付けられる。材料は主に組紐や織紐が用いられ、様々な色があり表紙に合うものを選ばれる。紐の先にはこはぜ（角や真鍮等で作った爪型の具）が付けられたものもある。
2	はっそう はつそう 八双/発装		表紙の端を固定するために、表紙の端を折り返した中に入れられる。素材は主に竹で、他に木や、大型の巻子では重みのある真鍮等の金属が用いられることもある。形状は半円柱形が多いが、厚みが薄い平板なものもある。
3	ひょうし 表紙		巻子を巻いた際に外側になる部分で、本紙の幅より若干大きめになっており、本紙を保護する役割と装飾を兼ねている。材料は様々な和紙や裂（無地裂、緞子（どんす）、金欄（きんらん）等）が使用される。本紙の内容に合うものを選ばれる。
4	だいせん だいせん 題箋/題箋		外題を書いて表紙の端に貼る短冊形の紙片。

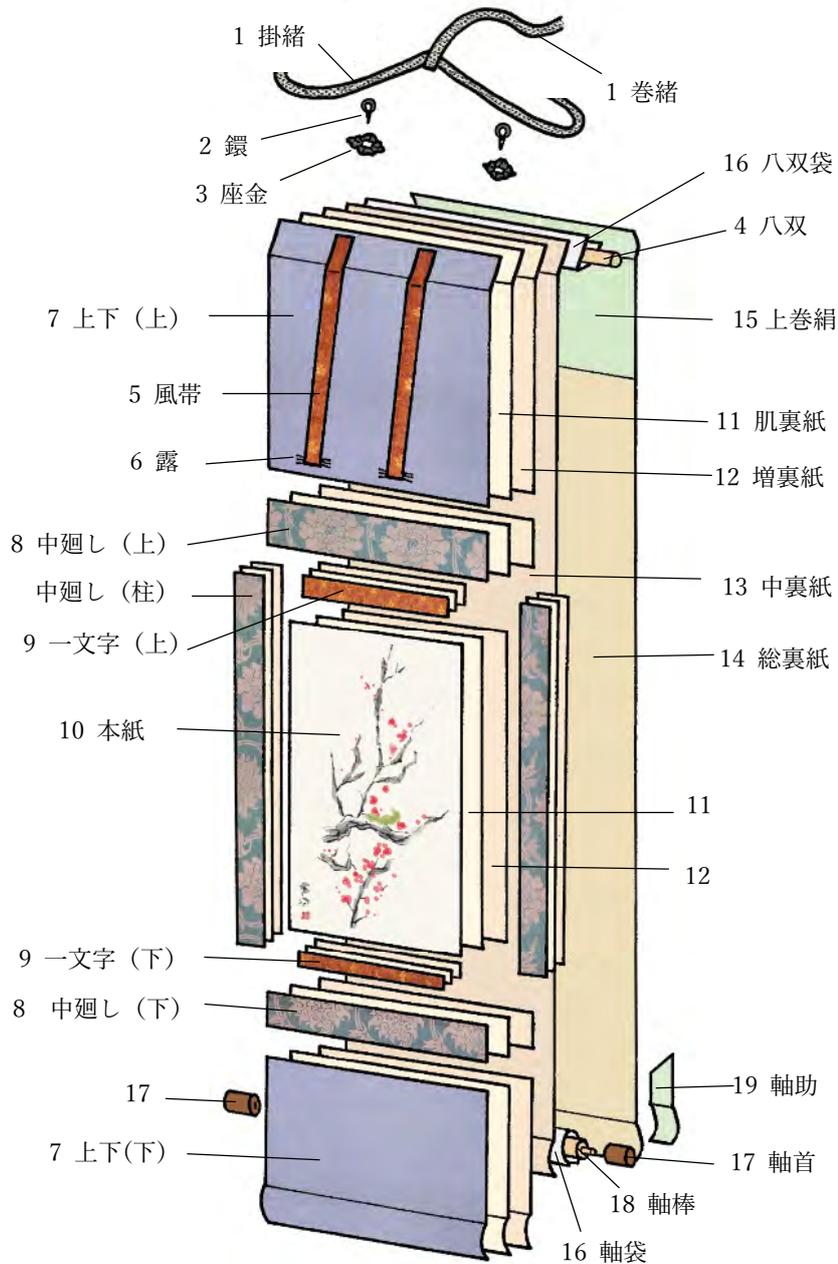
5	みかえし 見返し		表紙の裏側に貼られた紙。無地や砂子等の装飾が施されたものもある。巻子を広げた際に最初に目にするため、本紙の内容を想起させるような装飾が施されたものもある。
6	じくしゆ じくさき 軸首/軸先		軸端の保護と装飾を兼ねて取付けられる。素材は、木（紫檀・黒檀）・象牙・角・水晶・金属（金メッキ）等が使用される。形状は円柱形の切軸や切軸の小口に同心円状の溝を彫った印可（いんか）軸、先端が広がった撥（ばち）軸等、様々な形状や大きさがある。軸首の裏側には穴が穿たれており、軸棒の両端の突起と合わせて膠等で接着する。
7	じくぼう 軸棒	 切り合わせ軸	巻子の芯になる細い棒で、奥付に巻き込むように取り付けられる。素材は杉や檜木が用いられることが多い。太さは様々なものがある。軸棒の両端は、軸首の裏側の穴に合わせて丸い突起を削り出して使用するが、先端を削らず小口どうしを接着した簡易なものもある。「切り合わせ軸」といわれる、2本の軸棒の片方を削ぎ、削いだ部分を合わせて紙を巻いて軸棒の反りを防いだり、長さを調整できるようにしたものもある。また、表面に墨書がみられることもある。
8	ほんし 本紙		紙や絹が用いられ、本紙の材料に応じ、紙本、絹本などと呼ばれる。
9	おくづけ 奥付		本紙の後ろ、巻末に付けられる紙。
10	はだうらかみ 肌裏紙		本紙や表紙裂等を支えるために最初に裏打ちする際に使用される和紙で、薄美濃紙が多く用いられる。薄く柔軟だが丈夫な楮紙。糊はしっかり接着するように新糊（生麩糊）が用いられる。全紙の大きさ 約 90 cm×60 cm
11	ましうらかみ 増裏紙		肌裏打ちの次に行う裏打ちに使用される和紙で、美栖（みす）紙が用いられる。紙繊維に胡粉を混ぜて漉き、压榨せずに乾燥させた柔らかい楮紙。補強や厚み調整、柔軟性を持たせるために使用する。糊は巻子が柔らかく仕上がるように古糊（生麩糊を10年程度寝かせた糊）が用いられる。 全紙の大きさ 約 65 cm×25 cm
12	そううらかみ 総裏紙		本紙を継ぎ合わせて一体化させた後、裏面の仕上げとなる最後の裏打ちに使用される和紙で、特定のものは無い。巻子の裏側になる部分。表面が平滑な雁皮入りの楮紙等、様々な和紙が用いられる。糊は巻子が柔らかく仕上がるように増裏打ちと同じ古糊が用いられる。

参考文献 「表具の事典」編集・発行 協同組合京都表装協会

「装潢文化財の保存修理 東洋絵画・書籍修理の現在」編集・発行 国宝修理装潢師連盟

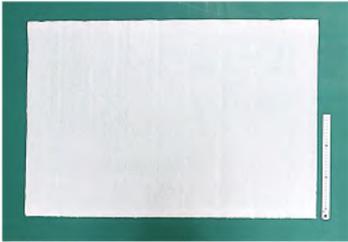
掛軸の構造と材料

掛軸の構造



掛軸の材料

	名称	写真	解説
1	かけお 掛緒 まきお 巻緒		掛緒は八双に付けられた環に結びつけられ、掛軸を掛具に掛ける紐。巻緒は掛緒に付けられ、掛軸を巻きとめる紐。掛緒と巻緒の材料は同じ組紐が用いられ、「啄木（たくぼく）」と呼ばれる三色の糸を使った平紐や無地の平紐が用いられる。様々な紐幅があり掛軸の大きさに合う太さのものが選ばれる。
2	かん 環		掛軸を吊り下げるための掛緒を結びつける金具。頭部を環状にした釘で、八双に打込んで取付ける。素材は鉄や銅、真鍮等。座金と合わせて使用する。

3	ざがね 座金		中心部に穴が開けられた飾り金具。鑲をこの穴に通して八双に打込む。素材は鑲と同じ。形状は菱、丸みを帯びた木瓜(もっこう)、菊等がある。
4	ほっそう かみじく 八双/上軸		掛軸の最上部に取り付ける棒で、ここに鑲を打込む。掛軸を掛けた際に平らに見えるようにしたり、巻いた際に巻き終わりの押さえになる。素材は軸棒と同じ杉が用いられる。断面は半円形が多いが、丸みを帯びた三角形等もある。
5	ふうたい 風帯		掛軸の上/天の部分に下げる2本の帯。表側は一文字や中廻しと同じ裂、裏側は上下等の薄手の裂が使われることが多い。風でなびくことによって鳥よけとしたものが形式化したものという説もある。
6	つゆ 露		風帯の下部の両脇に付けられた小さな房飾り。素材は燃っていない絹糸が使用される。主に白色が用いられるが色糸が使われることもある。
7	じょうげ/てんち 上下/天地	 表装裂	表装(表具)。様々な裂(無地裂、緞子(どんす)、金襴(きんらん)等)や和紙が用いられる。表具の形式も様々なものがある。材料や表具形式は本紙に合うものが選ばれる。
8	ちゅうまわ 中廻し		
9	いちもんじ 一文字		
10	ほんし 本紙		紙や絹が用いられ、本紙の材料に応じ、紙本、絹本などと呼ばれる。
11	ほだうらかみ 肌裏紙		本紙や裂を支えるために最初に裏打ちする際に使用される和紙で、薄美濃紙が多く用いられる。薄く柔軟だが丈夫な楮紙。糊はしっかり接着するように新糊(生麩糊)が用いられる。 全紙の大きさ 約 90 cm×60 cm
12	ましうらかみ 増裏紙		肌裏打ちの次に行う裏打ちに使用される和紙で、美漉(みす)紙が用いられる。紙繊維に胡粉を混ぜて漉き、压榨せずに乾燥させた柔らかい楮紙で、様々な厚さがある。補強や厚み調整、柔軟性を持たせるために使用する。糊は掛軸が柔らかく仕上がるように古糊(生麩糊を10年程度寝かせた糊)が用いられる。 全紙の大きさ 約 65 cm×25 cm

13	なかうらかみ 中裏紙		増裏打ちが済んだ本紙や裂を継ぎ合わせて一体化させた後に行う、中裏打ちに使用される和紙。増裏紙と同じ美栖（みす）紙が用いられる。糊も増裏打ちと同じ古糊が用いられる。中裏打ちは省略されることもある。
14	そううらかみ 総裏紙		中裏打ちの後、最後の総裏打ちに使用される和紙で、宇陀（うだ）紙が用いられる。紙繊維に白土を混ぜて漉いた楮紙。総裏打ちは掛軸の裏面の仕上げになる裏打ち。糊は掛軸が柔らかく仕上がるように古糊が用いられる。 全紙の大きさ 約 1m44.5 cm×32.5 cm
15	うわまきぎぬ 上巻絹		掛軸の裏面の最上部の薄青色や薄緑色等の透けるような平織の薄絹。総裏打ちの際、裏打ちを施したこの薄絹を最上段に裏打ちする。掛軸を巻いた際に外側になる部分で、和紙の毛羽立ちや手擦れ、紐の擦れ等から掛軸を保護する。
16	はっそうぶくろ 八双袋 じくぶくろ 軸袋		総裏打ちをする際に、八双や軸棒を入れる場所を確保するために置く、二つ折りにした厚手の和紙。これを所定の位置に置いて総裏打ちをする。仕上げの際に、二つ折り部分を開いて八双や軸棒を入れて取付ける。
17	じくしゅ じくさき 軸首/軸先		軸棒の端の保護と装飾、掛軸の巻き解きの手がかりを兼ねて取付けられる。素材は、木（紫檀・黒檀・漆塗り）・象牙・角・水晶・金属（金メッキ）等が使用される。形状は円柱形の切軸や、先端が広がった撥（ばち）軸等、様々な形状や大きさがある。本紙に合うものが選ばれる。軸首の裏側には穴が穿たれており、軸棒の両端の突起と合わせて膠等で接着する。
18	じくぼう 軸棒/ しもじく 下軸	  <p>金属が埋込まれた軸棒</p> 	掛軸を巻く際に芯になり、掛軸を掛けた際は平らに見えるようにするための最下部の棒。素材は杉が用いられることが多い。太さは様々なものがある。軸棒の両端は、軸首の裏側の穴に合わせて丸い突起を削り出して使用するが、先端を削らず小口どうしを接着した簡易なものもある。古いものでは掛軸を掛けた際に巻き戻らないように、軸棒の中心部に鉛等の金属を埋込んで軸棒を重くしたものもある。また、表面に表具師や施主の名前、製作年等の墨書が残されていることもある。
19	じくたすけ 軸助		掛軸の軸棒部分が重みや取扱いで裂けるのを防ぐために、掛軸の裏面下部に貼る補強用の薄絹の小片。材料は上巻絹と同じ。総裏打ちの最後に所定の位置に貼る。様々な形状がある。

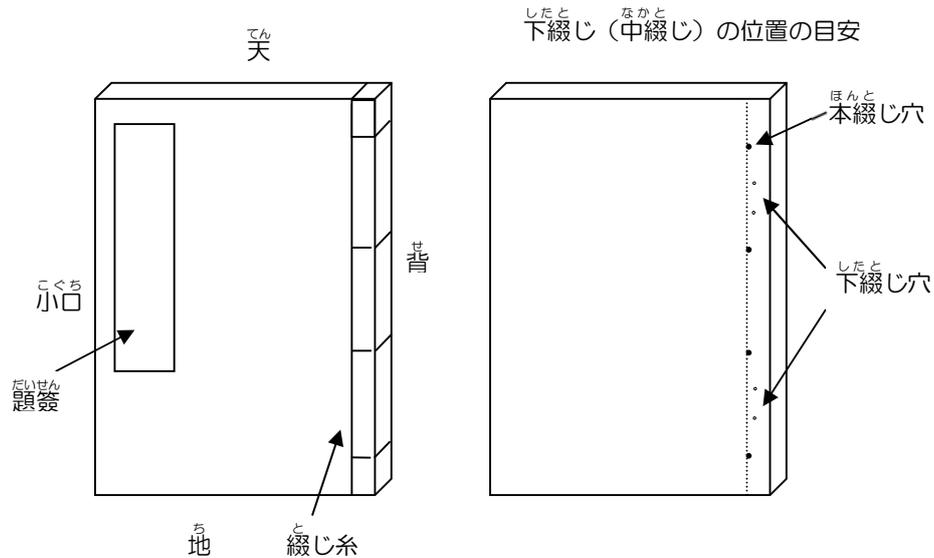
参考文献 「表具の事典」編集・発行 協同組合京都表装協会

「装潢文化財の保存修理 東洋絵画・書籍修理の現在」編集・発行 国宝修理装潢師連盟

四つ目綴じの綴じ方

和装本には、^{かんすほん}巻子本、^{おりほん}折本、^{でっちょうぞう}粘葉装、^{ふくろと}袋綴じなど様々な装丁があります。
ここでは一般的な袋綴じ、特にその中の四つ目綴じの綴じ方について説明します。

各部の名称



使用材料・道具

- こより用和紙 ^{こうぞ}楮100%の和紙：厚 15g/m²程度（薄美濃紙、^{せきしゅう}石州半紙など）
幅 2cm 長さ 20cm 程度
- 綴じ針 ふとん針や製本用綴じ針
- 綴じ糸 絹糸（^{たいはく}太白：太く白い絹糸の意）。
糸の太さは「（細）イ、ロ、ハ、ニ（太）」とあり、
今回は「ロ」を使用。長さは、本の天地の3倍半程度必要。
和綴じ本は太糸1本どり、漢籍は細糸2本どりが多い。
- 板 作業台として使用する。

※綴じ直しについて

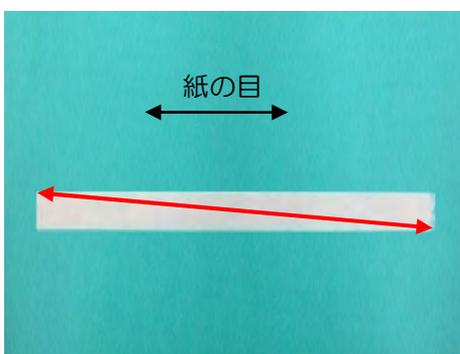
糸が多少切れたり緩んだりしていても、下綴じがしっかりしていて利用に支障がなければ綴じ直す必要はない。綴じ直しは元の糸を切るため解体につながり、かえって資料を傷めてしまうおそれがあるので、綴じ直しの判断は慎重に行う必要がある。

綴じ直す場合は、元糸は小袋に入れて資料と一緒に保管するとよい。

こよりで下綴じしてあることにより、綴じ糸が切れても本紙が散逸しない。
和本以外のこよりの活用法としては、ホチキスやクリップ留めしてある文書資料等の綴じ直しがある。ホチキスやクリップは、錆などで資料を傷める原因となるため取り外し、こよりで綴じ直すことにより資料を長く保存することができる。

1-1 こよりのより方

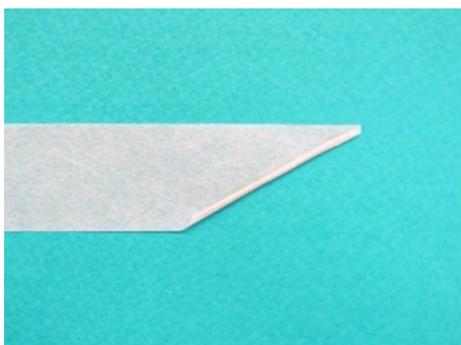
和紙のざらざらした面を上にして、より上げていく。



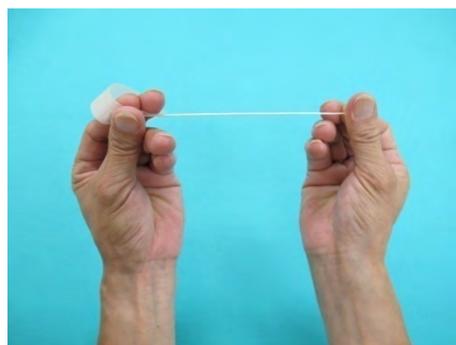
①こよりは和紙の対角線と同じ長さになるとよい。



②最初は右下角を両手親指と人差し指でより上げる。指先を湿らせるとよりやすい。

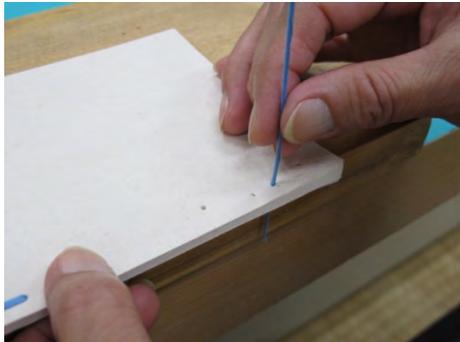


③より始めたところ。

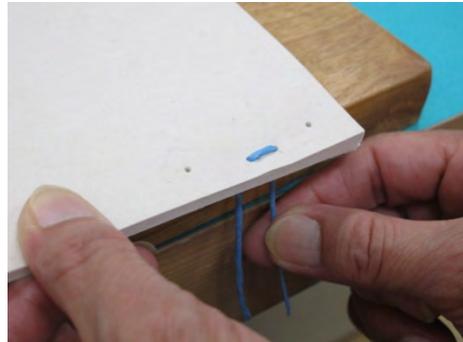


④こよりをピンと張った状態を保ち、左手でより上げていく。時々右手も回転させる。

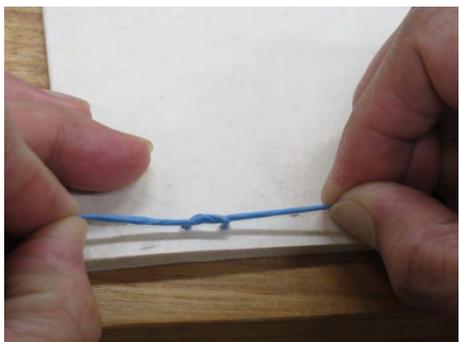
1-2 下綴じの綴じ方 (分かりやすいように青いこよりを使っています)



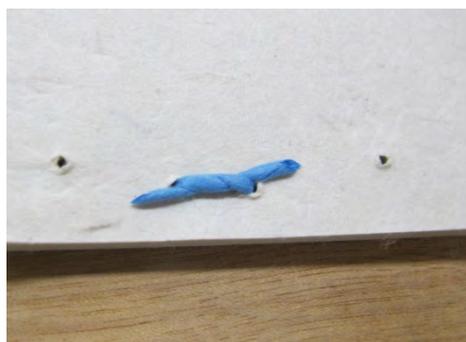
①こよりの両端を中綴じの穴2か所に通す。
穴に通りにくければ、端を斜めに切って
尖らせると通りやすい。



②下からこよりを引っ張る。



③裏で一回結び、結び目をハサミの背で
たたいてつぶす。たたくことで結び目が
しまり、ほどけにくくなる。

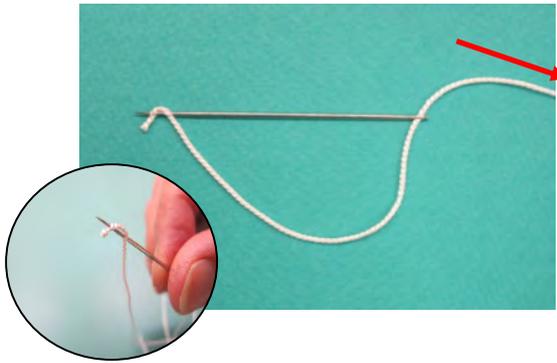


④両端5mm程度残してハサミで切る。

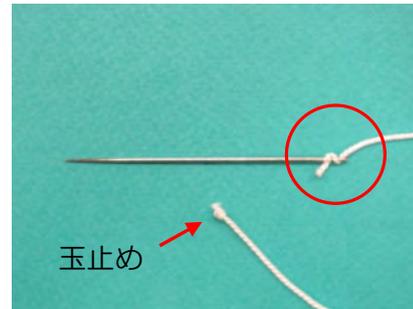
2. 四つ目綴じ

2-1 綴じ糸の下ごしらえ

下図のように糸を針に固定すると、綴じている間に糸が針から抜けることがなく、作業しやすい。



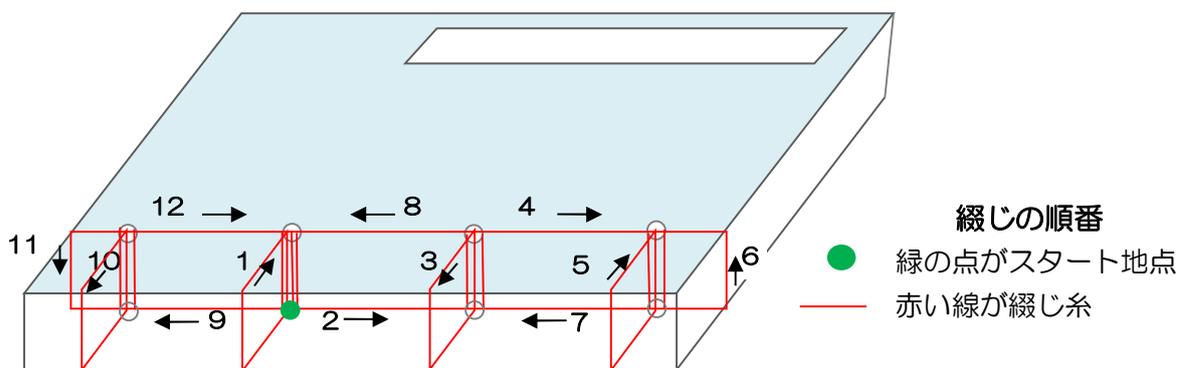
① 針穴に糸を通し、一方の糸先を2か所針に刺す。もう一方の糸先を矢印の方向に引く。

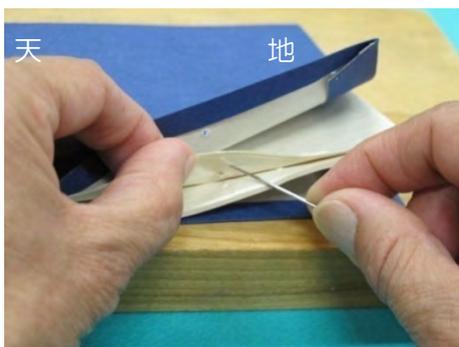


② 糸が針穴に固定される。もう一方の糸先を玉止めする。

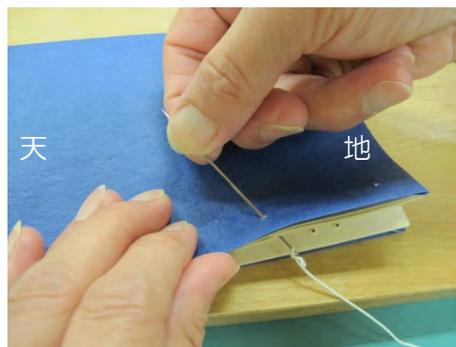
2-2 四つ目綴じの綴じ方

1つの穴に最低3回は針を通すので、2回目以降、すでに通してある糸に針を刺さないよう注意する。





①裏表紙を上、背が手前にくるようにおく。背を2~3丁めくり、地から2番目の綴じ穴と背の間の本文紙に針を刺し、針先は裏表紙の綴じ穴に出す。



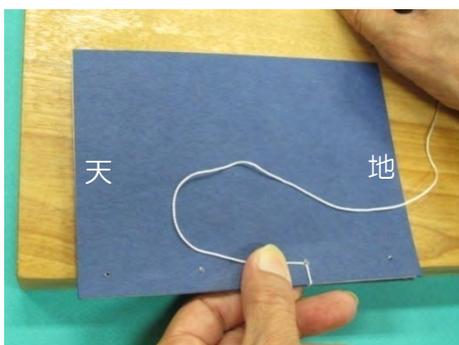
②裏表紙側の地から2番目の綴じ穴に糸を出す。



③玉止めが本文紙で止まり、糸が抜けることがない。



④おもて表紙側から同じ綴じ穴に針を入れ、背に糸がかかるようにする。



⑤綴じ穴の多い左側(天の方)へ進んでいく。



⑥糸が緩まないように、親指で糸を押えながら綴じていく。



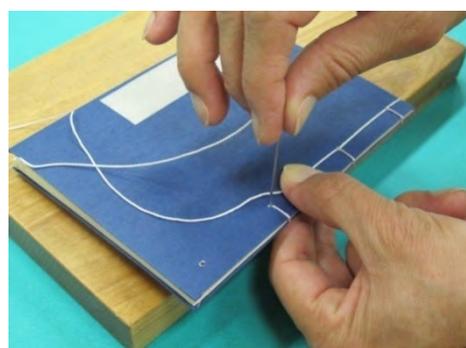
⑦おもて表紙に返し、天の穴に通し、次に背に糸をかけ、同じ穴に通す。



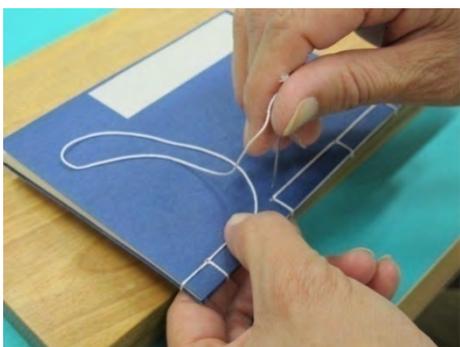
⑧天を綴じる時は、資料の天が手前になるように向きを変える(地も同様)。



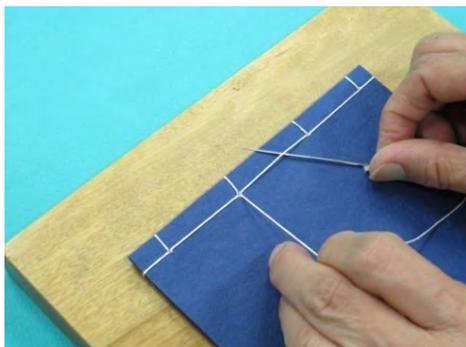
⑨天に糸をかけ、同じ穴に通す。次に裏表紙に返し、天から2番目の穴を綴じ、おもて表紙に返す。



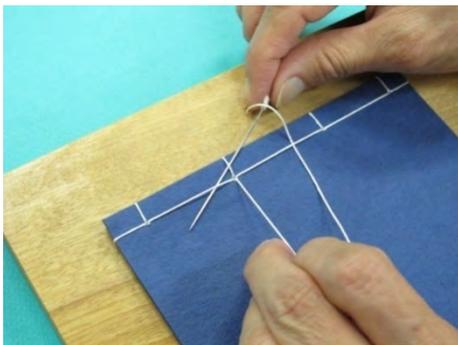
⑩スタート地点に戻る。この後、地も天と同様に綴じる。(⑦～⑨参照。)



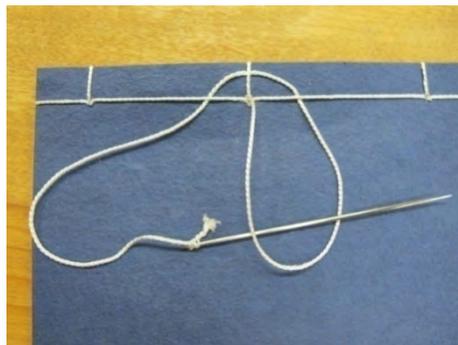
⑪再びスタート地点に戻り、針を裏表紙へ通す。この時点ですべての箇所にかがかる。



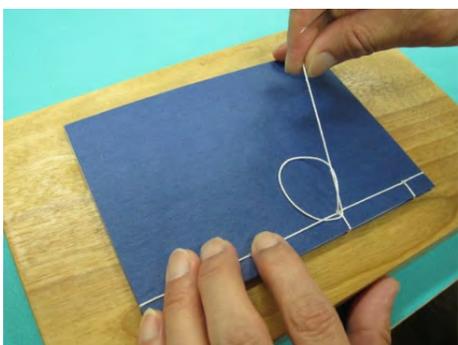
⑫最後に糸を結ぶ作業を行う。裏表紙に返し、綴じた糸の下3か所に針をくぐらせる。まず1か所目。



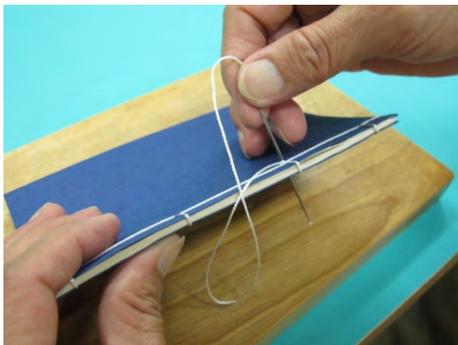
⑬残りの2か所の糸の下も針をくぐらせる。この時糸を引き絞らず、左手で糸の輪を作っておく。



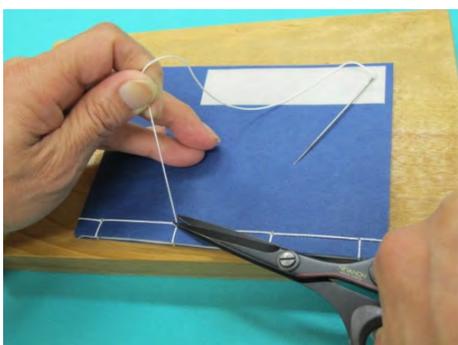
⑭針を糸の輪に通す。



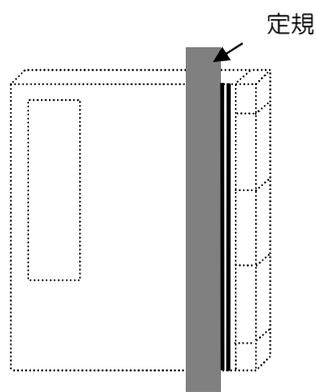
⑮糸を引くと、結び目ができる。たるみができないようにしっかり引く。



⑯針を同じ綴じ穴に通しておもて表紙側に出す。糸を表側に引くと、裏の結び目が綴じ穴の中に入って目立たなくなる。



⑰糸を引っ張りながらハサミで糸の根本を切る。他の糸を切らないよう注意する。糸の切り口が綴じ穴の中に隠れる。

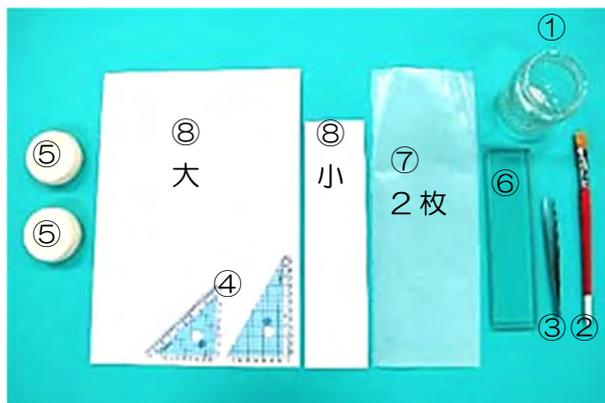


新しい本は、最後におもて表紙の綴じ糸の内側に定規をあて、へらで折筋を2本つける。折筋に沿って表紙を開けて軽く折りクセをつける。綴じ直しの場合は、既に折り筋がついているので、この作業は不要。

外れた^{だいせん}題箋の貼り方

外れた題箋を、資料に安全な材料や、身近な道具を使用して貼り直します。将来の修復の際にはがせるように、少量の糊で貼りつけます。処置の記録を残しておくといよいでしょう。

使用材料・道具



①	小麦粉澱粉糊（正（生）麩糊）（注） ジャムの空き瓶などに入れ、ケチャップくらいの濃度で水で溶く。
②	平筆
③	ピンセット
④	三角定規 2 枚
⑤	重石（小さめ）または文鎮 2 個
⑥	卦算（けさん）またはプラスチック製定規または平らな板 1 本 重石の圧力が題箋に均等にかかるよう、題箋より大きいもの。
⑦	クッキングシート 2 枚 （表面がつるつるして貼りつかず、水蒸気を通すシリコンペーパー） 題箋の上のせて使用する。
⑧	吸水紙（ろ紙やキッチンペーパーなど） 大小 2 枚 糊の水分を吸収させる。
⑨	捨て紙（コピー用紙など） 大小 2 枚

（注）小麦粉澱粉糊について

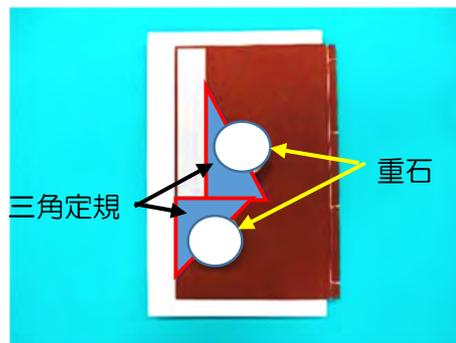
1. 一般に市販されている澱粉糊は、防腐剤などの添加物が含まれている。長期保存する資料には、防腐剤などを含まない糊を使用するとよい。
2. 小麦粉澱粉糊の粉は、大型画材店などや文化財の修復材料の Web サイトなどで販売されている。
3. 小麦粉澱粉糊は粉を 4～5 倍の水で溶いたものを鍋に入れ、焦がさないようによくかき回しながら強火～中火で 20 分程度煮て、容器に入れて冷ます。電子レンジを使用した少量の小麦粉澱粉糊の作り方は、「防ぐ技術・治す技術―紙資料保存マニュアル―」日本図書館協会 2005 年 p95 参照。

題箋が少し剥がれかけていても、取扱いに支障がなければ貼り直す必要はありません。取扱いに支障がある場合は、貼り直しを検討しましょう。また、ここでご紹介している方法は、一般的な和古書を対象としたものです。特に貴重な資料や、劣化が著しい資料に対応する方法ではありません。特に貴重な資料や劣化が著しい資料は、処置をせず専門業者にご相談することをお勧めします。

貼り方



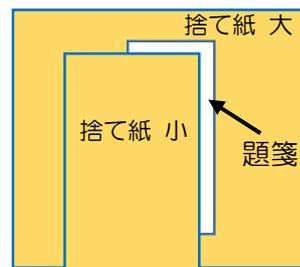
① まず、表紙と本文紙の間に吸水紙を挟んで、糊の水分が本文紙に移らないようにする。次に糊跡や類似の資料などから、外れた題箋を貼る位置を確認し、題箋を所定の位置に仮置きする。



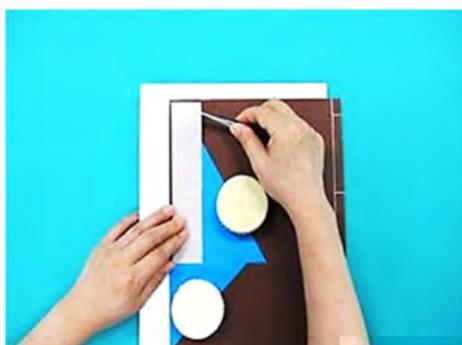
② 三角定規で貼る位置のガイドを作り、重石で固定する。



③ 題箋を捨て紙の上に裏側を上にして置き、周囲3mm程度糊をつける。手早く、薄く均一に塗る。糊染みの原因になるので糊をつけすぎないように注意する。



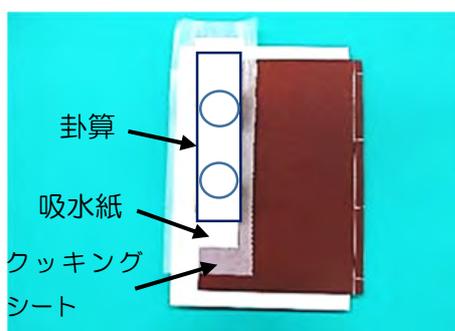
※糊の塗り方のヒント
2枚の捨て紙を使い、糊を塗る箇所以外を捨て紙で覆うと、2辺は手早く塗ることができる。



④ピンセットで題箋を持上げ、もう片方の手で端を持ち、②のガイドに沿って③の題箋を置く。



⑤題箋の上にクッキングシートを置き、手でよく撫でて接着させる。



⑥題箋の上に、もう一枚のクッキングシート、吸水紙、卦算、重石の順にのせて一晩置き、糊を乾燥させる。重石を置くと、題箋がしっかり表紙に貼りつく。また、糊が乾燥した後の表紙の引きつれを防ぐことができる。

※取り扱いに支障があるほど剥がれかけている場合は、題箋をめくって筆で題箋の裏側の周囲に糊を塗り、⑤～⑥の要領で乾燥させる。